

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第90号 2015年7月1日

資料見聞

農具類

夏の企画展「小さいもの見つけ
た! — 海洋堂のニッポン・ミニチュ
アカタログ—」で展示する農具類のミ
ニチュアです。縦130センチ、横83
センチの枠の中に何と280点もの道
具が飾られています。

上の方から、鋏、鋸、鎌、植木鋏、

備中鋏、土ならし、田植定規(筋引き)、
背負子、米選機、水車、犁、蓑、箕、
棧俵などがびっしり並んでいます。案
山子や鳴子の上には雀が止まっている
お遊びも。右下の棧俵は完成に1年か
かったという労作です。中央の枠内は、
茅葺き職人の道具で、数少なくなった
職人を探し求め、再現してもらったも
のだそうです。

ひとつの枠の中にたくさんの道具が

並べられている様はまさにミニチュア
によるカタログです。今回の企画展の
サブタイトルはこの印象から付けまし
た。

見事なミニチュアですが、残念なが
らどの地域の民具をモデルにしている
かがわかりません。民具の形や種類は
地方によって異なります。この作品は
一般的な農具のイメージを表したもの
と云うべきかも知れません。(梅野)



農具類 昭和57年(1982)

縦130cm、横83cmの額の中に、280点におよぶ農具のミニチュアが飾られている。

企画展

小さいもの見つけたい！ — 海洋堂のニッポン・ミニチュアカタログ —

平成27年7月17日(金)～9月6日(日)

梅野光興



江戸型神輿 昭和59年(1984) このミニチュアは、浅草通りの老舗の神具屋である南部屋五郎右衛門の製作。本物の神輿も製作している職人たちが本物以上の手間暇をかけて作り上げた逸品である。

しませんが、キセルなどを帯にはさむために作られた根付や、雛飾りの調度品の精巧さには感心するばかりです。

一方、そのような芸術的な物ばかりではなく、信仰の領域でもミニ

日本文化における小さい物の伝統

よく日本人は手先が器用で小さい物作りに長けていたと言われますが、事の真偽はともかくとして、日本文化の中に小さい物の伝統が脈々と受け継がれていることは確かです。今回は展示

チュアはよく使われます。当館の通常展示室でも、古墳時代の祭祀に用いられた手捏ね土器や、田植え前後に畦に祭るオサバイ様に供える農具の模型などそこそこに小さい物を見ることができます。神仏への供え物は小さくても十分用をなすと信じられていたので、社寺や祠に祀られた神仏の像

にも、もちろん大きな物もありますが、可愛らしい小さな物も多いのです。

今清水英一さんのコレクション

今回、展示するのは映画俳優の今清水英一さんがその生涯をかけて集めた物です。今清水

さんは大正13年(1924)、東京の下町に生まれ、幼い頃から近所の職人の仕事ぶりや、さらびやかな神輿の出る江戸の伝統的な祭りを見て育ちました。

時代が変わり、日本の古い文化が消えていくことに危機意識を持った今清水さんは、伝統文化のミニチュアを集め始めます。職人の道具や農具、神輿や山車、民家や店先の風景、和船や大八車、今清水さんの収集対象は広範囲に拡がりました。既にある



八百清 平成9年(1997) コレクションの中に、雑貨屋、魚屋、花屋、呉服屋など昭和初期の商店の店先を再現したシリーズがある。いずれも松浦義光さんの作。写真の八百屋も、店頭の実果・野菜のひとつひとつがリアルに作られている。

物を買うだけでなく、わざわざ職人に頼んで作ってもらった物もたくさんあります。出来上がりが気に入らなければ何度も作り直させる凝りようでした。その結果、二万点におよぶ日本文化のミニチュアが集まりました。今では現物が失われた物も多く、貴重なコレク

シヨンになっています。そして、今清水さんの没後、日本有数のフィギュアメーカーである海洋堂のコレクションとなりました。今回の展示は、その一部をご紹介します。

ミニチュアの世界に圧倒！

今清水さんが50年の歳月をかけて

集めたミニチュアは、その精巧さや量の多さで圧倒されます。4月からこのコレクションを展示した兵庫県立歴史博物館の香川雅信さんは、ミニチュアの金閣寺に本物以上の完璧さを感じるという三島由紀夫の小説「金閣寺」の一節や文化人類学者レヴィーストロースの言葉を使いながら、小さいミニチュアの方が、全体性を把握するには適している」と指摘、「ミニチュアの収集とは、全体性を志向する究極の遊びであり、神の世界創造の仕事に

も近い行為であるといえるのではないかと述べています。

ミニチュアを見る楽しみや興奮は世界の縮図を見ることによるものなのです。それを所有することは、世界を自分の物にするとも言えるでしょう。

実は、博物館もまったく同じ性質を持っています。現実世界ではわかりにくい世界の成り立ちを、自然界の生物



面とノミ 昭和60年(1985) 能面のミニチュアが55点並ぶ。女面と山姥面は実物大。面を彫るノミなどの道具が下段にズラリ並んでいる。

や人間の生み出した物を集め、分類して配置し全体像を指し示すのが博物館という装置の基本なのです。

物を集めるには強い意思と地道な努力が必要です。今清水さんも一つのことに的を絞って、最後までやり抜くことの大切さを訴えています。私たち博物館も特定のテーマでたくさん資料を集め、コレクションを作ることとは同

じです。今清水さんの執念までは無理でも、見習いたいものです。

海洋堂のフィギュア

今清水さんのコレクションを受け継いだ海洋堂も、小さい物を作り続けています。昭和39年(1964)に模型店として出発した海洋堂は、平成11年(1999)に手がけた菓子のおマケ(食玩)の動物フィギュアがヒットしたことから、日本を代表するフィギュアメーカーになりました。特撮やアニメや美少女から、博物館の所蔵品、今清水コレクションに通じる懐かしい暮らしの道具まで、さまざまなフィギュアを生み出しています。2階ロビーには、海洋堂のフィギュアを紹介するコーナーや、カプセルトイ(ガチャポン)の販売コーナーも設けま



郷愁 昭和63年(1988) 農家の生活風景を再現したジオラマ。

す。企画展期間中に、取締役社長の宮脇修一さんや造形師の松村しのぶさんの講演会、海洋堂のフィギュアを使ってミニジオラマを作る教室も開きます。過去から現代までのミニチュア・ワールドをご堪能ください。

歴史民俗学者
吉村淑甫初代館長と
歴史民俗資料館
岡本桂典



吉村淑甫先生 1997年(撮影:中村淳子)

初代館長であった吉村淑甫先生が本年5月4日に黄泉の国に旅立たれた。94歳であった。吉村先生は、大正9年9月30日に香美郡在所村(現・香美市香北町)に生まれ、永野高等小学校を卒業、高知新聞社を経て昭和31年に高知市史編纂所に入り編纂委員を務められ、その後高知市文化振興事業団、そして平成3年4月に高知県立歴史民俗資料館長に就任され、平成10年度まで勤めた。かつて文芸評論家の保田與重郎や版画家の棟方志功らと交流した。そして民俗学や歴史学を学び、驚くほ

ど広い視野をもっておられた。それは、先生の著書の至る所に現れている。私が吉村先生の名前を聞いたのは、高校生のころではなかったかと思う。その後、学生時代、葬送儀礼に興味をもち、昭和56年に先生の推薦で日本民俗学会に入会、雑誌『日本民俗学』で多くを学び、館では直接多くの指導をうけた。現在、在籍している学芸員は厳しく指導された記憶をもつ。さらに先生の幅広い人脈と知識で館の運営を軌道に乗せてくださった。

広報誌『岡豊風日』創刊号の巻頭で先生は生涯学習について触れ、「一つの遺品・遺物が一人の感動を呼びさますことが、私にはもっと大切だ。学習してできるものではない。」と書かれている。そこには深い意味があるように思う。退官後も博物館のあり方について手厳しい指導をされた。その指導に報えるようにと思うのだが。「君ら忙しすぎらあよ。けど、やらないあいかなあよ」と声が聞こえそう。もっとお話を聞いておけばよかったとつくづく思う。

先生と同じ年齢であった岡本健児先生も平成26年元旦に逝去された。同年齢で戦前戦後の昭和を生き抜いた先生方が去られると昭和が終わりを告げていることを実感する。 黙礼。



鏡川原ヲ歩ミテ笛ヲ聞ク
表題は壬生水石の詩書から。カバーは香南市徳王子若一王子宮の明治19年の浦戸湾絵馬。1998年、和田書房刊。



トビシャゴの村にて
「トビシャゴの村にて—現代少年漂流譚」「飛んできた種子—或る移住と開拓の物語」など7編を収録。1975年、椎野書房刊。



たなばたてんによ
物部・いざなぎ流の七夕祭文をもとに赤坂三好さんの画で絵本化。1978年、小峰書店刊。



仮面の神々ポスター 吉村先生がデザインを行ない、モノクロの物部の仮面に金色と赤い文字を組み合わせた。1992年。



土佐の神ごと
高知県の信仰関係の文章をまとめた1冊。カバーは佐賀町の土葬墓の日覆いの三途の川を渡る舟の絵(田辺寿男氏撮影)。1989年、高知市民図書館刊。



鯨海酔侯 山内容堂
先生には土佐の歴史上の人物に関する著作も多い。他に「龍馬の影を生きた男 近藤長次郎」も。1991年、新潮社刊。



岸豆 出身地である香美市香北町の少年時代の思い出を小説風に綴ったもの。当時の暮らしや文化が生生きとよみがえる。カバーや題字も先生による。2007年、風日舎刊。

追悼・吉村淑甫初代館長

人間を見るまなざし ― 研究と作品の魅力 ―

中村淳子

はじめて拝読した吉村淑甫先生のご著書は、『トビシヤゴの村にて』（昭和50年刊行）でした。先生は、あとがきに「〈民俗採集〉などという言葉の持つしらしさが、いつも付きまといつて離れない。別に学問でなくても、無垢のまま日本人の語るくらしの話をきいておきたい」と書いておられます。そこには、大上段に構える胡散臭さを嫌い、人々の話にただ耳を傾けようとする姿勢があらわれています。

同書は高知新聞に連載された「海の



土佐民俗 会報 桂井和雄氏が中心に発足した土佐民俗学会の会報。右から2、4、5号で、2、4号の表紙は吉村先生撮影。

人々」と「飛んできた種子」を収録しています。「海の人々」は、別のご著書『土佐民俗風土記―山の人々―』（昭和40年）と対のようになっています。

書名と同タイトルの「トビシヤゴの村にて」で先生は、土佐清水市貝の川の、見知らぬ少年の父を訪ねています。

少年は「黒潮にのつてくる」と言つて伝馬船で太平洋へ漕ぎ出し、帰らぬ人となりました。トビシヤゴは鳳仙花の方言で、熟した実がはじけて飛んでいくイメージが少年に重なります。

旅立つ前に少年は、身辺整理をしたそうです。けれど、「わたしら二人を、整理するのを忘れて行きましたんよ」という、遺された両親の、諧謔（かいぎやく）にくるまれた悲しみが心を打ちます。先生は、少年の父に深くお辞儀をして西行のバスに乗り去って行きます。

同書では、先生と一緒に歩き、話を聞いているように、その時代や地域が描写されています。新聞記事や当事者の聞き書をはさむ構成は映画のようで謎解きの趣きもあり、いつしか少年や彼のまわりの人々の思いに引き寄せられていきます。

すくい取られた言葉や別れの余韻には文学の香りがして、「詩人の民俗学」と呼びたい誘惑にかられます。愛媛県の由良半島から高知県の龍ヶ迫（たつがせき）へ集団移転して土地を開拓した人々の歴史を記述した「飛んできた種子」も、まるで美しい物語のようです。ご自身も文学的情緒の中に萌えだされたそれは種子の生理を述べることと綴っています。

しかし、先生は情感だけに留まらないう博覧強記の研究者でもありました。土佐民俗学会では草創期からのメンバーで第1号（昭和36年）から第15号（昭和43年）まで雑誌『土佐民俗』の編集にたずさわわり、同誌に祭礼芸能やいざなぎ流に関する調査報告を発表され、『土佐の神ごと』（平成元年）などにまとめています。

高知市立市民図書館の調査室に在勤中は高知地方史研究会のメンバーとして、『真覚寺日記』や『燈袋』などの史料を写したガリ版刷の『土佐群書集成シリーズ』を編集し、同館から刊行しています。『土佐民俗』第67号（平成8年）の土佐民俗発刊三十五周年特集座談会で「文献をもっとやっつけては」と提言されているのも宜なるかなです。

同室は研究者や文化人が集うサロンのようなだったと当時を知る方にうかがいました。何と芳醇（ほうじゆん）な場所でしょう。詩人の情熱と研究者の冷静な眼、聞

き書と文献、見知らぬ人とのふれあいと研究仲間との交流、それらが先生の学問の両輪となっていました。

また、本誌『岡豊風日』の名付け親と揮毫（きごう）は先生です。第1号（平成3年）の館長エッセイ「坂路からのあいさつ」の「昨日、文部省の若い役人から〈生涯学習〉の話を含入りに聞かされた。だが、わたしには十分にはのみ込めなかった」は、『トビシヤゴの村にて』のあとがきと重なります。

そんな吉村先生の自由な学問の場を求めて、私たちは時々、歴史館を退官された後も先生をお訪ねしていました。お話が熱を帯びると、まるでご講義を拝聴しているかのようでした。

今春、先生に電話をさしあげたときには、写真集『田辺寿男の民俗写真4 たましいの四季』を「あなたが編集した写真集の中で一番感動したよ」と、先生からおほめいただき、うれしくて心がふるえました。けれど最後とは思ってもよらず、もっとお教えいただきたいと、最近のご無沙汰に後悔あとを絶たずです。

トビシヤゴの少年の父は、親友の死を悼むテニスの詩をしきりに思い出していたとのことでした。

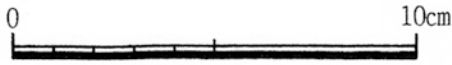
吉村先生の世界に魅せられた私たちは、これからもご著書をくり返し読み続けるでしょう。

考古

江戸時代の

ミニチュア炊事用具

1985年頃に東京都品川区大井鹿島遺跡発掘調査に参加したことがあります。この時に江戸遺跡つまり近世考古学にも興味をもつようになりました。また、新宿区の自證院遺跡（墓地の発掘）に関係したことがあります。ちょうどその頃、「江戸遺跡情報連絡会」後の「江戸遺跡研究会」が発足しました。この会は江戸（東京）の近世考古学的調査の増加により発掘担当者の情報交換を進めるために1986年に発足しています。高知県でも1980年から83年にかけて南国市田村遺跡群の発掘調査が実施され、近世の遺構や遺物が多数出土し注目されました。最近では、高知市内の中・近世遺跡の発掘調査が注目を浴びマスコミでも報じられることが多くなりました。これらの遺跡から江戸時代の焼き物で作られたミニチュアが出土することがあります。高知市内の金子橋遺跡や西弘小路遺跡（にしひろこうじ）などから出土しています。ミニチュアの一つに炊事道具があります。江戸時代にはミニチュアの諸道具で実生活を真似る遊び（ままごと）が定着したとされています。金子橋遺跡からは、釜を模した釉薬のかかったミニチュアの製品が出土しています。ミニチュアの竈（かまど）に置き用いられたものと考えられます。（岡本）



釜形のミニチュア
高知市教育委員会『金子橋遺跡』2008年より

歴史

ご子孫たちと語らう

5月17日、長宗我部家の重臣だった桑名弥次兵衛のご子孫が来館され、「長宗我部遺臣それぞれの選択」展を見学されました。地元紙でも大きく報道された14代目の桑名純平氏は、あまり先祖の経歴を知らない様子でしたので、急遽展示解説と相成りました。ひとしきり解説が終わったあと、純平氏は一つ一つの解説文を噛みしめるように熟読され、「これからは先祖に負けない生き方をしたい」と、ポツリとおっしゃられたのが、とても印象に残りました。

今回の展示会では、他にも香宗我部家や中内家の方々、さらに福富家・明神家の方達とも資料を前にお話しする機会がありました。私自身、これまで知らなかった各家ごとの家伝・口伝に接することができ、思い出に残る展示会となりました。



桑名家の方達と語らう

※実父は中内藤左衛門中富川合戦をはじめ、元親の四国平定戦に数多く従軍し戦功をあげた。内政面では、総国検地の筆頭検地奉行として活躍。中村城代も任されていた。主家改易のちは、藤堂高虎に高禄をもつて召し抱えられたが、大坂夏の陣において、大坂方の長宗我部盛親隊と戦い戦死した。（野本）

民俗

中尾の年中行事調査

2013年にNHK—BSで放送された「新日本風土記」という番組で香美市物部町のいなぎ流が取り上げられた際、「5人の村に100の神様」と紹介された集落があります。徳島県境に位置する別府でも最も標高の高い所にある中尾という集落です。今年の冬から松本善夫さんのお宅に年中行事の調査に通っています。正月や節供などかつてはどの家でも普通に行なわれていた年中行事は今や絶滅寸前です。松本さんは昔ながらの習俗を、大事にひっそりと続けています。若水を汲むこと、木を伐って薪を作ること、魔を払う節分の注連縄を張ること、先祖を祭ること…、一つ一つの行事は単純で素朴なものです。だからこそ山に暮らす人の大切にできたことが伝わってきます。



彼岸の墓参り



中尾の風景

実は、松本家は亡くなられた吉村淑甫先生がいざなぎ流の祭儀を調査した家でもありました。いざなぎ流の図録には当時の写真を掲載させて頂いています。時が移り、人が変わっても、松本家の年中行事は今も続けられています。（梅野）

にぎわう歴史の日

歴史館開館記念日の5月3日は、入館料が無料になります。今年もたくさんのお客様にご来館いただきました。(道脇)



岡豊山フォトコンテスト表彰式
今年も力作ぞろい!たくさんのご応募をいただきました。



土佐民話の家
市原先生のお話に引き込まれました。



ワクワクワーク「甲冑体験」
「大太刀に触ってみよう」
ふだんなかなかできない体験にみんなワクワクドキドキ!カルチャーサポーターさんも大活躍です。

元親飛翔之像完成!



飛翔之像建立委員会の尽力で長宗我部元親の銅像が完成! 5月3日には同会の主催により、完成記念式典がとり行なわれました。岡豊山を背景に建つ飛翔之像に、ぜひ会いに来てください。(道脇)

れきみんニュース



7日午前は大栃の町を歩き、博士の墓や陰陽師の子孫を訪ねました。



6日午後は香南市香我美町・赤岡町を博士やおおとこのしやうや大忍庄の痕跡を訪ねた。

エンコウ祭に行くと『学校の怪談』の著者の常光徹先生が! 左から国際日本文化研究センターの小松和彦先生、常光先生、県立大の橋尾直和先生。



神楽に続けて荒神鎮めが本来の形で初公開



保存会や中高生の迫力ある舞も披露された。



7日午後は保存会による神楽の公開。約200名の参加者が集まった。

いざなぎ流の原像

「博士」はかせ

を求めて

開催!

6月6・7日の二日間にわたって、いざなぎ流と物部川流域の文化を考える会の主催で、恒例のいざなぎ流企画が催されました。梅雨入り直後でしたが奇跡の好天。遠くは北海道や宮崎からも参加者があり、中世に莊園があった集落を巡りました。いざなぎ流の公開にも多数の参加者があり、地域文化への関心の高まりを感じました。(梅野)

